

## サハ語（ヤクート語）のクリティック\*

江 畑 冬 生  
(東京大学大学院)

### Clitics in Yakut (Sakha)

EBATA, Fuyuki  
Graduate School, University of Tokyo

Yakut (Sakha) clitics are clearly distinguished from suffixes, based on the vowel harmony and the stress-accent. However, we cannot differentiate clitics from independent words solely using phonology. The present paper classifies clitics into three types: (1) clitics in clause-final positions, (2) clitics in nominal, adjectival and adverbial phrases, (3) clitics in nominal phrases. Morphological features explain the difference between clitics and independent words. Independent words which look like clitics may take inflectional suffixes, whereas clitics cannot take any suffixes except sentence-final ones.

Keywords: Yakut, Sakha, clitic

キーワード：サハ語，ヤクート語，クリティック

1. はじめに
2. クリティックが持つ特徴
3. クリティック出現位置の統語的分類
4. クリティックに似た機能語
5. 結語

#### 1. はじめに

##### 1.1. 先行研究と本論文の立場

サハ語<sup>1</sup>（ヤクート語）は膠着的な形態特徴を持ち、接尾辞やクリティックを多用する<sup>2</sup>。サハ語文法研究における伝統的な立場では、クリティックを含む機能語は一律に小詞(частица)<sup>3</sup>と

\* 本論文は、東京外国語大学AA研における研究会「言語の構造的多様性と言語理論」（2006年12月）での発表原稿に加筆・修正を施したものである。研究会の場で貴重な助言を下された方々に厚く御礼申し上げる。草稿の段階で、東京大学大学院の内原洋人氏にコメントを頂いた。また英文要旨作成にあたり、同大学院のマーク・ローザ氏のお世話になった。記して感謝申し上げます。

<sup>1</sup> サハ語（ヤクート語）は東シベリアで話されるチュルク系の言語である。サハ語の音素は次の通り：/p, b, t, d, tʃ, ʒ, dʒ, k, g, s[s~h], x[χ~q], ʋ, m, n, ŋ[p], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, œ, œœ, u, uu, i, ii, u, uu, y, yy, ua, ie, uo, yoe/. 本論文では音韻表記を用いるが、[s]と[h]に関しては音声的な隔たりを考慮して書き分けている。筆者の過去の論文では/tʃ, dʒ, ŋ/という表記を用いていたが、本論文以降は/ç, ʒ, ñ/を用いることにする。

<sup>2</sup> 接頭辞と考えられるものは一つしかなく、指示詞などごくわずかな名詞にしか付かない。また、サハ語のクリティックはすべて後接語(enclitic)である。

<sup>3</sup> 小詞は英語のparticleに相当する。Zwicky(1985)が述べるように、言語の研究においては雑多な形式がparticleと呼ばれてきたが、その中にはクリティックと考えるべきものもあれば、自立語と見なさなければ

呼ばれる範疇に分類されてきた。小詞の中には、全く語形変化をしないものから名詞語幹と同様に接辞が尽きうるものまで、様々な形式が含まれている。本格的なサハ語の小詞研究として唯一のものにPetrov(1978)があるが、Petrovの扱う100余の形式(変化形含む)の中には、後置詞<sup>4</sup>やその他の機能語が含まれている。

このような研究の現状から、小詞という範疇について言語事実と照らし合わせつつ整理する必要がある。本論文では、従来小詞とされてきた形式群の一部をクリティックと呼び、その特徴を記述する。サハ語のクリティックは、音韻的特徴から接尾辞と明確に区別される。むしろ自立語、特に語彙的意味を持たない機能語との区別が困難だが、形態的特徴から両者が区別されるのだという事実を明らかにしたい。

## 1.2. 言語資料

サハ語の話者は約40万人であり、そのほとんどはロシア連邦のサハ共和国(人口約110万人)に居住している。本論文中の例文の多くは、サハ語新聞『Эдэр Саас』の1999年7月～2001年6月の記事コーパスより用いた。また、母語話者のНеустроева Наталия氏の協力により、新たな例文を教えて頂いた。

## 2. クリティックが持つ特徴

クリティックは、「語」としての資格を持つ拘束形式である。語であるという点では自立語との違いが、拘束形式という点では接尾辞との違いが問題となる。本節では、クリティックの持つ特徴について、主として音韻の面から自立語や接尾辞と対比させ論ずる。

### 2.1. 「語」の特徴

サハ語における「語」は一つ以上の音節から成る。サハ語の音節構造は(C)V(C)(C)と表すことができる。ただし、子音連続で終わる音節((C)VCC)は語末音節にしか許されない。

語境界は、音韻的特徴により定めることができる。一つには、母音調和がある。母音調和規則により、同一語中に前舌母音と後舌母音とが共起することは許されない。接尾辞が付き、語が拡張された場合、接尾辞にも母音調和規則が適用される。

- |     |    |                 |              |        |
|-----|----|-----------------|--------------|--------|
| (1) | a. | aka-but • -ttan | 「私たちのお父さんから」 | [後舌母音] |
|     |    | 父-POSS.1PL-ABL  |              |        |
|     | b. | ije-biti-tten   | 「私たちのお母さんから」 | [前舌母音] |
|     |    | 母-POSS.1PL-ABL  |              |        |

語境界を定めることのできるもう一つの音韻的特徴に、強勢<sup>5</sup>がある。サハ語はいわゆる一型アクセントの言語であり、常に語の最終音節に強勢が置かれる。つまり、強勢の置かれた音節が語境界であると言える。

二つの語が複合語や句を形成する場合、前の語の強勢は保たれるが、後の語の強勢は弱化してしまう。

- |     |    |            |      |    |             |        |
|-----|----|------------|------|----|-------------|--------|
| (3) | a. | timír suol | 「鉄道」 | b. | sańá kinige | 「新しい本」 |
|     |    | 鉄 道        |      |    | 新しい 本       |        |

ならないものもある。

<sup>4</sup> 筆者は江畑(2004)において、後置詞と小詞の区別を行い、両者の違いについて「後置詞は格支配を行うが小詞は格支配をしない」という結論に達した。

<sup>5</sup> サハ語の強勢は強きアクセントであり、強勢のある音節はほぼ常に高ピッチを伴う。稀に低ピッチが観察されるが、子供に教え諭す場合や揶揄を含む場合などである。

もちろん、語用論的な理由などにより後の語にも強勢を置くことは不可能でない。

## 2.2. 接尾辞の特徴

クリティックは拘束的な形態素であることから、言語によっては接辞との区別が不明瞭である場合がある。クリティックの議論に移る前に、本節ではサハ語の接尾辞の特徴を描写しておく。

サハ語の接尾辞は、母音調和による母音の交替および子音の同化による交替形を多数持つ。例えば、(4)に示すように、与格接辞は *-ka*, *-ke*, *-ga* 等の交替形を持つ。また接尾辞は、語幹末の子音を逆行同化により交替させることがある。(4d)では、*ut*「犬」の語幹末子音 *t* が、接尾辞の *k* に逆行同化している。

- |     |    |               |      |    |                |                          |
|-----|----|---------------|------|----|----------------|--------------------------|
| (4) | a. | <i>mas-ka</i> | 「木に」 | b. | <i>tiis-ke</i> | 「歯に」                     |
|     |    | 木-DAT         |      |    | 歯-DAT          |                          |
|     | c. | <i>uu-ga</i>  | 「水に」 | d. | <i>uk-ka</i>   | 「犬に」 ( < <i>ut</i> 「犬」 ) |
|     |    | 水-DAT         |      |    | 犬-DAT          |                          |

(2)で述べた通り、サハ語では常に語の最終音節に強勢が置かれる。接尾辞が付き、接尾辞の母音が語の最終音節となる場合、強勢はその接尾辞上に移る。

- |     |    |            |    |                |    |                   |
|-----|----|------------|----|----------------|----|-------------------|
| (5) | a. | <i>okó</i> | b. | <i>oko-bút</i> | c. | <i>oko-butú-n</i> |
|     |    | 子          |    | 子-POSS.1PL     |    | 子-POSS.1PL-ACC    |

接尾辞の形態論的特徴を二つ挙げるができる。一つは、接尾する相手（ホスト）の選択制限である。例えば、*-LEEX*, *-TEE*・*I*, *-LI*<sup>6</sup>などの派生接尾辞は名詞語幹<sup>7</sup>にのみ付くことができる。もう一つは、接尾の順序が決まっている点である。例えば、数・所有・格を表す屈折接尾辞はこの順で名詞語幹に付けられる。この順を変えると文法的に適格ではなくなる。

例外的にホストの選択制限を持たず、名詞語幹にも動詞語幹にも付く接尾辞がある。一つは、主語の人称・数を表す接尾辞である。(6)に示すように、主語の人称・数を表す接尾辞は述語が名詞である場合にも動詞である場合にも用いられる。

- |     |    |                        |          |
|-----|----|------------------------|----------|
| (6) | a. | <i>min saxa-bum</i>    | 「私はサハ人だ」 |
|     |    | 私 サハ-COP.1SG           |          |
|     | b. | <i>min bar-bap-pum</i> | 「私は行かない」 |
|     |    | 私 行く-NEG.PRES.1SG      |          |

他に、文末の語に付き、文全体のモダリティを表す接尾辞が二つある。一つは疑問詞疑問文に現れる疑問接辞 *-NI/-II/-J* で、もう一つは詠嘆を表す *-TIN/-IN* である。例えば疑問詞疑問文に現れる疑問接辞 *-NI/-II/-J* は、(7a)では名詞に、(7b)では動詞に付いている。

- |     |    |                      |                |
|-----|----|----------------------|----------------|
| (7) | a. | <i>aat-uj kim-ij</i> | 「お名前は何といいますか」  |
|     |    | 名-POSS.2SG 誰-Q       |                |
|     | b. | <i>xajuu-gun-uj</i>  | 「あなたは何をしていますか」 |
|     |    | 何する:PRES-2SG-Q       |                |

<sup>6</sup> いくつかの交替形を持つ接尾辞を、スモールキャピタルで表すことにする。

<sup>7</sup> 筆者は、サハ語における名詞と形容詞の形態論的な区別を認めていない。一方で、統語的に名詞句と形容詞句との区別は行う。本論文では、例えば「名詞」と言った場合は形態論的観点に、「名詞句」と言った場合は統語的観点に立っていることを意味している。

- c. massuutuna elbek-*ín* 「車が多いね！」  
 車 多い:COP.3SG-詠嘆

### 2.3. クリティックの特徴

接尾辞とクリティックは、どちらも拘束形式であるが、両者の音韻的特徴は明確に異なる。第一に、クリティックは強勢を担わない。接尾辞の場合とは異なり、強勢はクリティックの上に移らない(8)。ここで注意したいのは、クリティックの上に強勢が置かれず、ホストの強勢は保たれるということである。つまり、(3)に示した複合語や句における強勢のパターンと、外見上同じ構造になっている。

- (8) a. kinigé =*ere* 「本だけ」      b. kinige-ní =*ere* 「本だけを」  
 本 =だけ                                      本-ACC =だけ

接尾辞とは異なり、クリティックは母音調和などによる交替形を持たない。語幹の音を同化させることもない。(9)の各例において、左は接尾辞、右はクリティックである。

- (9) a. xaar-dá 「雪を」                                      xáar =da 「雪も」  
 雪-PART    雪 =も  
 b. oton-nó 「ベリーを」                                      otón =da 「ベリーも」  
 ベリー-PART    ベリー =も  
 c. uk-ká 「犬に」 (< ut 「犬」)                      út =da 「犬も」  
 犬-DAT    犬 =も

言い換えれば、クリティックはそのホストに母音調和しないということである。先に述べた強勢と合わせ、「自立語+自立語」と「自立語+クリティック」とは、純粋に音韻の面だけでは区別をすることは出来ないのだと言える。なお、正書法、クリティックは分かち書きされる。

## 3. クリティック出現位置の統語的分類

前節では、サハ語のクリティックの音韻的特徴を、自立語や接尾辞と対比させながら概観した。本節ではクリティックの実際の用例を挙げることでその特徴を記述していく。ここでは、クリティックを分類するのに統語的基準を用いる。以下では、(1) 節の末尾に現れるクリティック、(2) 名詞句・形容詞句・副詞句に現れるクリティック、(3) 名詞句に現れるクリティック、の順に用例を提示する。なお本節以降では、強勢を表記しないこととする。

### 3.1. 節末に現れるクリティック

クリティックの中には、決まって節の末尾に現れるものがある。サハ語では節の終わりに述語が現れるため、これらクリティックはたいてい述語に付くことになる。もちろん、述語が省略されている場合などでは、述語以外の要素の後にクリティックが現れることもある。

節末に現れるクリティックを、① 主に文末に現れるもの、② 従属節のみに現れるもの、の二つに分類して用例を提示する。また、一部のクリティックには接尾辞が付くことがある。3.1.3 節以降では、接尾辞の付加される位置に関して見ていくことにする。

#### 3.1.1. 主に文末に現れるもの

サハ語では一般に、いくつかの節から成る文において主節が最後に現れる。つまり、文末とは主節の末尾と言い換えることができる。文末に現れるクリティックは何らかのモダリティを表すものが多く、次のようなものがある： 肯否疑問文を作る=*duo*「～か」、選択疑問文を形

成する=*duu*<sup>8</sup>「～か」、聞き手に同意を求める=*dii*「～じゃないか」、話し手の主張を強める=*ee*「～だよ」、問い返しを表す=*daa*「～なの」、驚嘆を表す=*ñii*「～とは」、伝聞を表す=*yhy*「～らしい」、推測を表す=*ini*「～だろう」、過去コピュラを表す=*ete*「～であった」、証拠性を表す=*ebit*「(実は)～だった」、=*ere*(用法は後述)。

- (10)      bu      en      kinigé-ŋ      =*duo*  
             これ    君      本-POSS.2SG    =か  
             「これは君の本ですか？」

- (11)      satuuu      tuoraa-tu-but      =*ee*  
             徒歩で      渡る-PAST<sup>9</sup>-1PL    =よ  
             「(私は)歩いて渡ったんだよ」

=*ere*は、命令文では若干の丁寧さを表し、平叙文では述語について「～だけ」の意を表す。

- (12)      manu      tut      =*ere*      「これを持って下さい」  
             これ:ACC      掴む:IMP.PRES:2SG    =CLT<sup>10</sup>

- (13)      ikki      uol      kyösty-1-ler      =*ere*  
             2      青年      炊事する-PRES-3PL    =だけ  
             「二人の青年が炊事をしているだけである」

伝聞を表す=*yhy*、推測を表す=*ini*、過去コピュラを表す=*ete*「～であった」、証拠性を表す=*ebit*「(実は)～だった」の現れる位置は、文末に限らない。ただし、文末でない場合は(14)のように重文における節末に現れることが多い。

- (14)      ys =*ere*      nuučča      oko-to      yöeren-er      =*ebit*,  
             3 =だけ      ロシア      子-POSS.3SG      学ぶ-PRES:3SG    =だった  
             bu      olox      aŋujax      =*yhy*  
             これ      大変      少ない:COP.3SG    =らしい  
             「3人だけロシア人の子供が学んでいるのであった。これは大変少ないらしい」

選択疑問文を表す=*duu*も、重文を形成していると考えることができよう。

- (15)      maŋnaj      melodija-tu-n      suruj-a-ŋut      =*duu*, tuŋ-ŋu-n      =*duu*  
             始めに      メロディ-POSS.3SG-ACC      書く-PRES:2PL    =か      言葉-POSS.3SG-ACC    =か  
             「始めにメロディを書くのですか、詞を(書くの)ですか？」

### 3.1.2. 従属節のみに現れるもの

従属節の末尾のみに現れるクリティックには、=*da*と=*ere*がある。

=*da*の一つの機能に、逆接「～けれども」を表すものがある。

- (16)      öelyöexyme-ŋe      bar      dien      sybelee-bit-tere      =*da*,  
             [地名]-DAT      行く:IMP.PRES:2SG      と      助言する-PAST-3PL    =けれども

<sup>8</sup> *duu*が単独で用いられる場合は、反問「～かな」を表す。

<sup>9</sup> サハ語には、近過去、遠過去、結果過去という三つの過去時制があるが、簡便のため、グロスではそれらを区別せず単にPASTとした。

<sup>10</sup> クリティックの意味を表すのが困難である場合、CLTというグロスを付けることにする。

akkaastam-muut-uum

拒む-PAST-1SG

「(彼(女)らは) Өлүөхүмэ<sup>11</sup>に行けと助言したけれども、私は拒んだ」

仮定を表す節において、=da は逆接的に、=ere は順接的に仮定を強める働きをする。

- (17)        bakar-dar-buun    =da        kuuak-uum        suoX  
               望む-SBJ-1SG    =も        能力-POSS.1SG    ない\COP.3SG  
 「私がたとえ望んだとしても、能力がない」

- (18)        kus        uoj-dak-w-na        =ere,        kiir-ie-m  
               鴨        肥える-COND-3SG-PART    =CL        入る-FUT-1SG  
 「鴨が肥えたとしたら、(狩りに)入ろう」

### 3.1.3. クリティックと接尾辞との前後関係

節末に現れるクリティックの過半は、接尾辞を取らない。しかし 3.1 節の始めに述べたように、クリティックの後に接尾辞が現れうるものがある。その際、接尾辞が必ずクリティックに付く場合もあれば、ホスト（その多くは述語）に付いても良い場合もある。以上のことを図式的に示すと(19)のようになる。

- (19) クリティックと接尾辞の形態素配列

- |           |   |           |           |                   |
|-----------|---|-----------|-----------|-------------------|
| (A)       | <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>HOST WORD</td></tr></table> -SUF   | HOST WORD | =CL       | [接尾辞は必ずホストに付く]    |
| HOST WORD |   |           |           |                   |
| (B)       | <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>HOST WORD</td></tr></table>        | HOST WORD | =CL-SUF   | [接尾辞は必ずクリティックに付く] |
| HOST WORD |   |           |           |                   |
| (C)       | <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>HOST WORD</td></tr></table> (-SUF) | HOST WORD | =CL(-SUF) | [接尾辞はどちらか一方に付く]   |
| HOST WORD |   |           |           |                   |

ここでの議論に該当する接尾辞は、いずれもホストの選択制限のないものである(2.2 節を参照)。以下、主語の人称・数を表す接尾辞(3.1.4 節)、疑問詞疑問文の接尾辞(3.1.5 節)、詠嘆の接尾辞(3.1.6 節)について、節末に現れるクリティックが(19)のうちのどのパターンを取るかを検討する。

### 3.1.4. 主語の人称・数を表す接尾辞

主語の人称・数を表す接尾辞が現れる位置に関して、過去コンピュータを表す=eteは、通常(B)のパターンを示す。例えば、単数の各人称では(20)のようになる。=eteの-teは近過去を表す接辞であり、主語が3人称単数の場合のみに用いられる<sup>12</sup>。他の人称・数では、-teの異形態-tiに人称・数を表す接尾辞が付けられる。このことを示すため、下に=eteのパラダイムと動詞et「言う」の近過去時制におけるパラダイムとを比較する。動詞のパラダイムでは、近過去接辞-ti/-teと、各人称・数を表す接辞とを形態素分析して示した。

- (20)        eder    {=eti-m / =eti-ŋ / =ete}  
               若い    {=COP:PAST-1SG / =COP:PAST-2SG / =COP:PAST:3SG}  
 「私 / あなた / 彼(女) は若かった」

=eteのパラダイム  
 1SG: eti-m    1PL: eti-bit  
 2SG: eti-ŋ    2PL: eti-git  
 3SG: ete        3PL: eti-ler

et「言う」のパラダイム  
 1SG: et-ti-m    1PL: et-ti-bit  
 2SG: et-ti-ŋ    2PL: et-ti-git  
 3SG: et-te        3PL: et-ti-ler

<sup>11</sup> サハ語でӨлүөхүмэ, ロシア語でОлёкминскと呼ばれる, サハ共和国南西部の町。

<sup>12</sup> 近過去接辞を取り去った語幹部分e-は、チュルク諸語に共通する形式でコンピュータを表す。証拠性を表す=ebitもe-の結果過去形に由来する。

ただし、=ete 自身が特定の人称・数を表さなくなってしまう場合もある。例えば、仮定に対する帰結節の場合などには(A)のパターンが現れる。(21)では、1人称単数の主語を示す接尾辞-*m*の後に=eteが現れる。このような場合、=eteはもはや3人称単数主語を表す形式とは言えないであろう。

- (21) araxsu-but-uum buol-lar, yčygejdik olor-uo-m =ete  
 別れる-VN.PAST-1SG なる-SBJ 良く 住む-VN.FUT-1SG =COP:PAST  
 「もし私が離婚していたならば、上手く暮らしていたであろうに」

伝聞の=yhy<sup>13</sup>、推測の=iniおよび証拠性を表す=ebit<sup>14</sup>は、(C)のパターンを示す。主語の人称・数を示す接尾辞は、(22a)のようにホストに付く場合もあれば、(22b)のようにクリティック自体に付く場合もある。

- (22) a. kiine-ler-ge koer-dy-gvt =ini  
 映画-PL-DAT 見る-PAST-2PL =推測  
 「おそらく映画でご覧になったでしょう」  
 b. toko-tu-n oejdyr =ini-git  
 何故-POSS.3SG-ACC 分かる-VN:PRES =推測-2PL  
 「何故だか、お分かりでしょう」

上記以外のクリティックは例外なく(A)のパターンをとる。つまり、主語の人称・数を表す接尾辞は必ずホストに付く((11)には=eeの例を示してある)。

### 3.1.5. 疑問詞疑問の接尾辞

疑問詞疑問文に現れる接尾辞-NIJ/-IJ/-Jについては、(7a)および(7b)で示した。この接尾辞の現れる位置に関して、伝聞の=yhy、過去コピュラの=ete、証拠性を表す=ebitは(B)のパターンを示す。

- (23) armija olok-o onton tuox uratuu-laax =yhy-nyj  
 軍隊 生活-POSS.3SG それ:ABL 何 違い-持ち =伝聞-Q  
 「軍隊の生活は、それ<sup>15</sup>とはどんな違いがあるとのことだろうか？」  
 (24) kurguut-tar tuox sanaa-laax =ebit-ter-ij  
 女の子-PL 何 考え-持ち =だった-COP:3PL-Q  
 「女の子たちはどんな考えだったのか？」

これら三つ以外のクリティックが疑問詞疑問文に現れる接尾辞-NIJ/-IJ/-Jと共起する例は見つからなかった。疑問の接尾辞が共起しないのは、意味的な理由による可能性もある。

### 3.1.6. 詠嘆の接尾辞

詠嘆の接尾辞-TIN/-INについては、(7c)で示した。この接尾辞の現れる位置に関して、驚嘆の=niïは(A)のパターンを示す。

<sup>13</sup> =yhyは歴史的には、*æs*「言葉」に三人称単数の所有接辞の付いた*æn.æ*に遡るとされる。この場合の所有接辞は所有関係を表すのではなく、*æs*を除いた命題部分を受けて「～とのことだ」という意味を表したのであろう。主語の人称・数を表す接尾辞は、元々命題部分、つまりホストに付くものだったが、所有接辞が話者に分析されなくなっからは、クリティックに付くケースが生まれたのだと推測できる。

<sup>14</sup> Petrov(1978: 159)も「叙法の小詞*ebit*は、しばしば先行語の接辞を取る」と述べている。

<sup>15</sup> 新聞からの用例。前の文脈における「親元を遠く離れた寄宿寮での学校生活」を指す。

- (25) yčygej-in =*nii* 「(それは) 何と良いのだろう！」  
 良い-詠嘆:COP.3SG =驚嘆

驚嘆の=*nii* 以外のクリティックが詠嘆の接尾辞-TIN/-IN と共起する例は見つからなかった。詠嘆の接尾辞が共起しないのは、意味的な理由による可能性もある。

### 3.2. 名詞句、形容詞句、副詞句の後に現れるクリティック

名詞句、形容詞句、副詞句の後に現れるクリティックには=*da*, =*ere*, =*eme*, =*emit* がある。これらには何らの接尾辞も付かない。

=*da*には四つの用法がある。(A) 日本語の「～も」にあたる用法(26), (B) 否定表現と呼応し全部否定を表す(27), (C) 形容詞句または副詞句の後で強調を表す(28), (D) 疑問詞の*xas*「いくつ」と結びつき不定代名詞を作る。=*ere*は、名詞句や形容詞句の後で「～だけ」を表す他、「疑問詞 =*ere*」が不定代名詞として用いられる(29)。「疑問詞 =*eme*または =*emit*」も不定代名詞として用いられる<sup>16</sup>。

- (26) et-i =*da* sii-bin  
 肉-ACC =も 食べる:PRES-1SG  
 「私は肉も食べます」
- (27) xanna =*da* bar-bap-pun  
 どこへ =も 行く-NEG:PRES-1SG  
 「私はどこへも行かない」
- (28) tyngen-nik =*da* aas-ta  
 速い-ADV LZ =も 過ぎる-PAST:3SG  
 「(それは) とても速く過ぎ去った」
- (29) kim =*ere* xanna =*ere* uksutu-r  
 誰 =か どこへ =か 急ぐ:PRES-3SG  
 「誰かがどこかへ急いでいる」

### 3.3. 名詞句の後に現れるクリティック

=*basas*「～くらい」は、名詞句の後にのみ現れることが出来る。=*basas*には何らの接尾辞も付かない<sup>17</sup>。=*basas*の付く名詞句は必ずしも名詞語幹である必要はなく,(32)のように形動詞<sup>18</sup>が名詞句を成す場合にも現れることができる。

- (30) ot =*basas* bujjuul yyn-e sataa-but  
 草 =くらい 今年 育つ-CV できる-PAST:3SG  
 「今年、草くらいは育つことが出来た」

<sup>16</sup> 「疑問詞 =*eme* あるいは =*emit*」は、対象を話者が具体的に表せないだけでなく、対象が存在するか否かも明確でないときに用いられる。

<sup>17</sup> 実は、=*basas*に接尾辞が付くことがある。Sleptsov(1972)やPetrov(1978)には=*basas*に接尾辞が付いたものとして=*basas-taax*, =*basas-tar*, =*basas-taru*, =*basah-um*の四つが挙げられている。興味深いことに、これら四形式は、全く同一の接尾辞が付いた語に後置される。例えば、次の例を参照。

*mutuk-taru basas-taru tiej-de* 「彼(女)は、(木を)枝でもなんでも運んできた」

=*taru* は、「～をも」のような意味を表す接尾辞である。このような現象自体も十分考察に値するが、=*basas*自体の意味も接尾辞が付く場合と付かない場合とでかなり異なることから、=*basas-taax*等はクリティックではないと考え別の機会に論ずることとした。

<sup>18</sup> 形動詞とは平たく言えば、動詞の名詞形である。名詞句あるいは形容詞句としての役割を担うが、項構造を保存するなど動詞としての性格も残している。



- (31)      *onu*            =*basas*            *bil-e-bin*  
 あれ:ACC =くらい      知っている-PRES-1SG  
 「私はそれくらいは知っています」
- (32)      *ahuuu-r-butuu-gar*            =*basas*            *baar*  
 食べる-VN.PRES-1PL-DAT =くらい      ある:COP.3SG  
 「私たちが食べるくらいには（お金が）ある」

3.4. 小結 –クリティックの特徴–

本節では、クリティックをその統語的位置に関して分類し、その特徴を明らかにした。本論文で扱ったクリティックについて、次頁の表にまとめる。

「接尾辞」欄中の、(A)、(B)、(C)は(19)に示したどのパターンが現れるのかを示している。従属節では疑問や詠嘆の接尾辞は現れない。また、節末以外ではいずれの接尾辞も現れない。関与的でないデータを示すため、「–」を用いた。

クリティック自体に接尾辞が付きうるパターン、すなわち(B)または(C)のパターンを示すクリティックは、=*ete*, =*ebit*, =*yhy*, =*ini*の四つしかない。これらのうち、=*ete*, =*ebit*, =*yhy*は自立語を起源とすることが判明している（脚注12および13）。

=*ere*は文末、従属節、名詞句、形容詞句、副詞句に、=*da*は従属節、名詞句、形容詞句、副詞句に現れる。Sleptsov(1972)の辞書など、これまでのサハ語研究ではこれらを同一の形態素であるとみなしている。=*ere*にも=*da*にも接尾辞が付くことはない。両形式の用法は多岐に渡るが、接尾辞の付き方を見る限りでは同一形態素という結論を覆す証拠はないと言える。

位置		形式と意味	接尾辞		
			人称・数	疑問	詠嘆
節末	文	= <i>ete</i> 「～だった（過去コピュラ）」	(B)*	(B)	×
		= <i>ebit</i> 「（実は）～だった（証拠性）」	(C)	(B)	×
		= <i>yhy</i> 「～とのことだ（伝聞）」	(C)	(B)	×
		= <i>ini</i> 「～だろう（推測）」	(C)	×	×
		= <i>nii</i> 「～とは（驚嘆）」	(A)	×	(A)
		= <i>duo</i> 「～か（肯否疑問文）」	(A)	×	×
		= <i>duu</i> 「～か（選択疑問文）」、反問	(A)	×	×
		= <i>dii</i> 「～じゃないか」	(A)	×	×
		= <i>daa</i> 「～なの」	(A)	×	×
		= <i>ee</i> 「～だよ」	(A)	×	×
	= <i>ere</i> 「～するだけ」、命令文で丁寧さ		×	×	
	従属節	= <i>da</i> 「～けれども」	(A)	–	–
		= <i>ere</i> 「～だとすれば」	(A)	–	–
名詞句・ 形容詞句・ 副詞句	= <i>da</i> 「～も」、全部否定など	–	–	–	
	= <i>ere</i> 「～だけ」	–	–	–	
	= <i>eme</i> （疑問詞と共に不定代名詞）	–	–	–	
	= <i>emit</i> （疑問詞と共に不定代名詞）	–	–	–	
名詞句のみ	= <i>basas</i> 「～くらい」	–	–	–	

\* ただし帰結節では(A)のパターンを示す。



## 5. 結語

サハ語のクリティックは、それが現れる統語的環境により次の三種類に分類できる。

- 1) 節末に現れるもの。
- 2) 名詞句，形容詞句，副詞句に現れるもの。
- 3) 名詞句のみに現れるもの。

クリティックと接尾辞との違いは、音韻的な基準により明確である。

- a) 接尾辞は母音調和による交替形を持つが、クリティックには交替形がない。
- b) 接尾辞は語幹末の子音を同化させることがあるが、クリティックはホストに影響しない。
- c) 語末強勢は、接尾辞の上には移るが、クリティックの上には移動せず、ホストに置かれるままである。

クリティックと自立語との区別は音韻的な基準によっては明確にならず、代わりに形態的基準を用いることができる。すなわち、クリティックに付くことのできる接尾辞は、ホストを選ばないもののみであるのに対し、クリティックでない機能語には屈折接辞や派生接辞が付きうる。

## 略号

ABL	奪格	PART	分格
ACC	対格	PAST	過去
ADVLZ	副詞化接辞	PL	複数
COND	条件	POSS	所有接辞
COP	コピュラ	PRES	現在
CV	副動詞	Q	疑問接辞
DAT	与格	SBJ	仮定
FUT	未来	SG	単数
IMP	命令	VN	形動詞
NEG	否定		

## 参 考 文 献

- 江畑冬生. 2004. 「サハ語（ヤクート語）の後置詞」. 林徹・梅谷博之編『チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズム 研究調査報告』（CSEL Series 6）. 東京大学 人文社会系研究科・文学部 言語学研究室. pp.1-16.
- Petrov, N.E. 1978. *Chastitsy v jakutskom jazyke*. Jakutsk: Jakutskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- Sleptsov, P.A. 1972. *Jakutsko-russkij slovar'*. Moskva: Izdatel'stvo sovetskaja ensiklopedija.
- Zwicky, Arnold M. 1985. "Clitics and particles". *Language* 61(2). pp.283-305.